

Title	物語という語の二つの性質について
Sub Title	Monogatari' in its original meaning
Author	大輪, 靖宏(Owa, Yasuhiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.20, (1965. 11) ,p.24- 37
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00200001-0024

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

物語という語の二つの性質について

大 輪 靖 宏

物語というと、竹取物語・源氏物語といったような文学作品が、我々の頭に浮かぶ。このように、今日、我々が普通に使っている物語という言葉は、日記文学・和歌文学などと並ぶ、一つの文学形態を指しているのである。しかし、物語という言葉は、こうした意味以外に、昔から、色々の文学作品の中に用いられている。詳しい意味は後述するとして、大ざっぱにいうならば、「話をする」という意味において使われているのである。こうした意味の物語という語は、物語文学という文学形式が成立する以前から、使われていたらしい。ということは、つまり、「話をする」という意味の物語という言葉が、後に、今日物語文学という名で呼ばれている文学形態を指すようになったのだと考えることができる。言いかえれば、今日、物語文学という語で呼ばれている文学形態は、モノガタリという言葉で呼ばなければならない性質を持つものであったのである。それ故、物語という言葉が、本来、どのような使われ方をしていたかを考えてみることは、物語文学の本質を知る上で、是非とも必要な事柄と言えよう。この小論は、こうした目的で、物語という言葉が、どのような使われ方をしているかを調べたものである。

ここで源氏物語を材料に使っているのは、源氏物語が、

- (1) テキストとして最も信用できること
- (2) 用例が豊富であること
- (3) 小説作品であるため、物語という言葉の使われた状況がよく分ること及び、

(4) これらの条件を満たすものの中で最も古いものであること
 という理由からである。又、当時の他の作品中の用語例を検討しても、現在調べた範囲では、源氏物語の用語例に準ずるものばかりである。

源氏物語の中に使われているモノガタリという言葉は、吉沢義則氏の「対校源氏物語新釈」の索引によると三三五例ある。このうち、文学の一形態——即ち物語文学——を指すものが四十四例あるが、これは何を指しているかがはっきりしているし、又、本論の目的はこうした文学の一形態を指す物語の意味を、普通に使われたモノガタリの語を通して調べるところにあるので、この四十四例は今回の調査の対象からは除く。又、四例は五十日に達した幼児のするモノガタリであるので、これも今回の調査の対象には入れない。

従って、残った一八七例が、今回の考察の対象となる。この一八七例のモノガタリという言葉の内容状況によって分類してみると次のように分けられる。

- (1) 亡き人をしのび、残された人を慰めるモノガタリ (十例)
- (2) 悩みを持つ人を間接的に慰めるモノガタリ (三例)
- (3) 悩みを持っている人を慰めるモノガタリ (四例)
- (4) 亡き人についての昔モノガタリ (三十二例)
- (5) 昔モノガタリ(大切な思い出) (一例)

- (6) 何とはなき昔モノガタリ (一例)
- (7) 男女のモノガタリ (三十三例)
- (8) 男女間の大方のモノガタリ (二例)
- (9) 世のモノガタリ (十七例)
- (10) 場所のモノガタリ (七例)
- (11) 年頃のモノガタリ (九例)
- (12) 御機嫌伺いのモノガタリ (二十七例)
- (13) 上から下へのモノガタリ (十例)
- (14) 相互にする親しいモノガタリ (三十一例)

——以上合計一八七例——

このうち、第一のグループは、(1)(2)(3)である。これらはいずれも、何らかの事情から生じた空虚感を埋める為の手段としてのモノガタリである。このうち(1)は、愛する人に死なれて、心に空虚感を持つている人を慰める為に行なわれるもので、次のようなモノガタリがこれにあたる。これは宇治の大君を失なった薫が、大君恋しさから、女房達にさせるモノガタリである。

雪のかきくらし降る日、ひねもずに眺め暮して、世の人のすさまじき事にいふなる十二月しはすの月夜づよの、曇りなくさしいでたるを、
 簾垂まきあげて見給へば、向ひの寺の鐘の聲、枕を敬てて、今日も暮れぬとかすかなるを聞きて、

おくれじと空ゆく月を慕ふ哉遂にすむべき此世ならねば

風のいと激しければ、葎しよおろさせ給ふに、四方の山の鏡と見ゆる汀のこほり、月影にいと面白し。京の家の、限りなくと磨くも、

えかうはあらぬはや、と覺ゆ。わづかに生きいでて物し給はましかば、もろともに聞えまし、と思ひ續くるぞ、胸よりあまる心地する。

戀ひわびて死ぬる薬のゆかしきに雪の山にや跡をけなまし

なかばなる偏教へむ鬼もがな、ことつけて身も投げむ、と思すぞ、心きたなき聖心なりける。人々近う呼び出で給ひて、御物語などせさせ給ふけはひなどの、いとあらまほしうのどやかに心深きを、見奉る人々、若きは心にしめてめでたしと思ひ奉る。老いたるは、口惜しういみじき事をいと思ふ。

(総角)

このように、薫の心は、亡き大君を追っているものであり、それを引きとめようとして女房達のモノガタリが行なわれているのである。そして、それは同時に、死んだばかりで、まだ宙に浮いている魂を鎮める為のものでもあるのであろう。桐壺の巻においても、命婦が亡き桐壺更衣の宅へ弔問に行っている間に、帝は宮中において「心にくきかぎりの女房四五人さぶらはせ給ひて、御物語せさせ給ふなりけり」とあるが、これも亦、同じ性質を持つモノガタリなのである。

(2)は、(1)のような直接的な方法と違って、間接的な方法をとったものである。即ち、愛する人に死なれた人を慰める為、わざと無関係な話題をモノガタリの内容とするものであって、(1)のように、直接、相手の悩みに触れたりはいしない。例えば、葬上を失なつた源氏を、三位の中將が慰めるモノガタリなどがこれにあたる。

御法事など過ぎぬれど、正日ま^{しうにち}でなほ籠りおはす。ならばぬ御つれづれを、心苦しがり給ひて、三位の中將は、常にまゐり給ひつつ、世の中の御物語など、まめやかなるをも、又例の亂りがはしき事をも聞え給ひつつ慰め聞え給ふ……

(葵)

この(1)と(2)は、内容が直接的であるか、間接的であるかの違いだけで、モノガタリの果している役割は同じだと考えられる。

又、(3)は、悩みの原因が、死ではなく、旅などによる別れであるという点だけが(1)と異なっている。例えば、須磨の巻において、須

源	氏 (一例)	夕霧	↓	匂宮	(一例)
紫	上 (一例)	源氏	↓	明石上	(一例)
六条	御息所 (一例)	源氏	↓	秋好中宮	(一例)
葵	上 (一例)	源氏	↑↓	太政大臣 (頭中將)	(一例)
北山	の尼君 (一例)	少納言	↓	惟光	(一例)
八	宮 (二例)	薰 薰	↓ ↓	浮舟 大君	(一例) (一例)
大	君 (三例)	母 薰	↓ ↓	弁 中君	(一例) (二例)
夕	顔 (五例)	右近 源氏	↓ ↓	玉鬘 右近	(四例) (一例)

なる。

この昔モノガタリが行なわれた時、話題になっている人は、すべて故人となっている。この(4)に対して、(5)(6)は問題にならぬほど数が少ないので、昔モノガタリとは亡き人についての語りであると言ってしまっても良いかと思われる。しかも、右の表を見ると、昔モノガタリにおいては、話題になる人・話し手・聞き手の三者は、きわめて密接な愛情関係にあることが分る。即ち、昔モノガタリとは、過去においてなんらかの愛情関係にあった故人についての話ということになる。

なお、ここでは「ふるモノガタリ」というものも、内容的に同じと考えて、昔モノガタリの中へ含めてあるが、厳密に昔モノガタリだけをとり出せば、(4)の昔モノガタリは、三十二例のうち二十二例となる。

(5)は一例だけで、源氏が柏木に向って、太政大臣（頭中将）の思い出を述べる場面に使われている。

院は昔物語、いで給ひて、「おほきおとどの、よろづの事に立ち並びて、勝負かちまひの定めし給ひしなかに、鞆たもとなむえ及ばずなりにし。はかなき事は、傳へあるまじけれど、物の筋は、なほこよなかりけり。いと目も及ばず、かしこうこそ見えつれ」と宣へば……

（若菜上）

この場合も、頭中将家の芸事の伝統をほめたたえてしていると解せば、この昔モノガタリも(4)の中に入れてしまつてよいかも知れぬが、いささか付会の気味があるので、一応これだけは別にたてておく。過去の大切な思い出について、昔モノガタリという語が例外的に使われた例と考えたい。

(6)も一例だけで、内容のない昔モノガタリである。これは須磨の巻で、朧月夜のことから家に閉じこもっている源氏が、ひそかに左大臣邸を訪問した際、左大臣の言う言葉の中に出てくる。

「つれづれに籠らせ給へらむ程、何と侍らぬ昔物語も、参り来て聞えさせむと思ひ給ふれど……」
（須磨）

この場合、内容のないことを示すために、左大臣はわざわざ「何と侍らぬ」という言葉を使っている。このことから逆に考えると、普通の物語は必ず「何とはある」ものであるらしい。事実、(4)及び(5)は、当時者にとってきわめて重要な事柄が、モノガタリの内容となつていたのである。

第三のグループは、(7)及び(8)である。これは共に、男女の間で行なわれるモノガタリであつて、必ず男から女へ行なわれる。このうち、(7)は、いわゆる恋の口説であつて、内容はごく特殊な場合を除いては、はっきりと示されていない。例えば、源氏が女三宮に向つて、モノガタリする場面で「晝の御座おまじに打臥し給ひて、御物語など聞え給ふほどに、暮れにけり。」(若菜下)と書かれているようなものである。

(8)は、源氏物語本文中に「大方の」と、わざわざことわつてあるように、愛情に関する事柄が問題にならない場合——即ち、単なる会話である場合——の男女のモノガタリである。このことも亦、昔モノガタリと同様、逆に考えれば、男女の間でモノガタリが行なわれれば、それはただちに恋の口説であることを意味するからであると考えられる。だからこそ、男女の間で、愛情問題ではなく、親しい会話が行なわれた時は、「大方の」とことわる必要があつたのであろう。

第四のグループは、(9)①②③④であつて、報告的な要素を持つているものである。即ち、相手が見たがっている事柄についてなされるもので、相手の知識的なブランクを埋める手段として使われるモノガタリなのである。

このうち、(9)の「世のモノガタリ」は、恋物語などの、世間のトピックスが内容となつてゐる。又、②の「場所のモノガタリ」は、「山里の御物語」(松風)、「かしこの物語」(須磨)、「国の物語」(夕顔)、「都の御物語」(須磨)の如く、聞き手の知らない他の場所についてのモノガタリである。又、③の「年頃のモノガタリ」は、日頃のモノガタリを含み、自分の一定期間の行動についての報告である。これらのモノガタリは、例えば、源氏が北山に「わらはやみ」の治療に行つて来た後で、「君はまづうちに参り給ひて、日頃の御物語など聞え給ふ」(若菜)という具合に使われる。いずれもこれは、相手に隠すところなく、すべてを打明けてゐるのである。この態度は、相手に対して裸になつてみせてゐるもので、言いかえれば、相手に他意のないことを示す手段として、モノガタリが使われているのである。

こうした①②③④のようなモノガタリの使われ方が日常化し、特別の場合だけでなく、ちょっとした御機嫌伺いにも使われるようにな

ったのが、囃のモノガタリであろうと思われる。この囃のモノガタリは、どのような事柄が内容となつてゐるかは、源氏物語本文中にはまったく示されていないので、分らない。ただ、この囃のモノガタリを検討してみると次のような例が見出せる。

ここの宿守すくもりにて住みけるもの、時方を主と思ひてかしつきありけば、このおはします遣戸を隔てて、所得がほに居たり。聲引きしじめ、かしこまりて物語しけるを、いらへもえせず、をかしと思ひけり。
(浮舟)

このような例の「聲引きしじめ、かしこまりて」物語をするところから考えてみると、こうした御機嫌伺いのモノガタリは、或る程度、形式化してゐたのではあるまいかと考えられる。又、次のような例——左大臣邸へ行った源氏が、暑いためにくつろいでいるところへ、左大臣が挨拶に来たという場面——もある。

おとども渡り給ひて、うちとけ給へれば、御凡帳隔てておはしまして、御物語聞え給ふを「暑きに」と、にがみ給へば、人々笑ふ。「あなかま」とて、脇息けいそくに寄りおはす。いと安らかなる御振舞なりや。
(帚木)

これも左大臣が、形式ばった物語をしているので、源氏が「この暑いのに」とにがりきつた、と考えるべきであろう。このように、囃のモノガタリは、多分に形式化したものと考えられるが、基本的な性質は、他の囃のモノガタリと同じものと認めることができよう。

これまで述べて来たモノガタリは、昔モノガタリの中に、三つ例外があつただけで、他はすべて、身分の下の者から上の者に向つて、又、男女のモノガタリだけは、男から女へ向つて、なされてゐたのである。ところが、これに対して、ごく少数ではあるが、モノ

ガタリが、身分の上の者から下の者へ向って、行なわれることがある。これが囃のモノガタリである。例えば次のようなもので、これは明石姫君が入内した時、つきそって行った紫上が、交代のために参内した明石上に初めて逢う場面である。

立ちかはり参り給ふ夜、御對面あり。衆「斯く大人び給ふけぢめになむ年月の程も知られ侍れば。うと／＼しき隔ては残るまじうや」と、なつかしう宣ひて、物語などし給ふ。これも打解けぬる初めなめり。
(藤裏葉)

本来、下から上へ向ってなされるべきモノガタリが、このように紫上から明石上へ向ってなされるということは、特別な親しみを、上の者が示している——言いかえれば、破格の厚遇を示している——ということの意味する。又、他に、この囃のモノガタリの中には、上の者が打解けた態度を示し、その態度をもって、下の者に本音を吐かせようとする誘導的なものもある。こうした囃のモノガタリは、モノガタリをする人間の関係が逆になっただけで、モノガタリそのものの機能は、御機嫌伺いのモノガタリと同じであると考えられる。

最後のもの、囃は、親しい者同士の間で、相互に行なわれるものである。今までのモノガタリが、語り手と聞き手がはっきり分れていたのが、相互的になったというだけであって、モノガタリの内容は、囃や囃と同じく深い意味のあるものではなく、又、モノガタリの機能も囃や囃と同じである。

源氏物語に現われたモノガタリという言葉について、どのような内容の会話であるか、どのような機能を持っているか、という点から検討し、分類してみると、以上のようなになる。これを同一用例の多いものから言うと、(7)の「男女のモノガタリ」が三十三例で一番

多く、(4)の「亡き人についての昔モノガタリ」が三十二例でこれに次ぎ、つづいて、(4)の「相互にする親しいモノガタリ」が三十一例、(4)の「御機嫌伺いのモノガタリ」が二十七例ということになる。同一用例の少ないものは例外的・変則的な使われ方をしているものと考えてよいであろうから、モノガタリという言葉本来の使われ方は、このような(7)(4)(4)(4)のあたりにあるのではあるまいかと、一応、考えることが出来るのである。

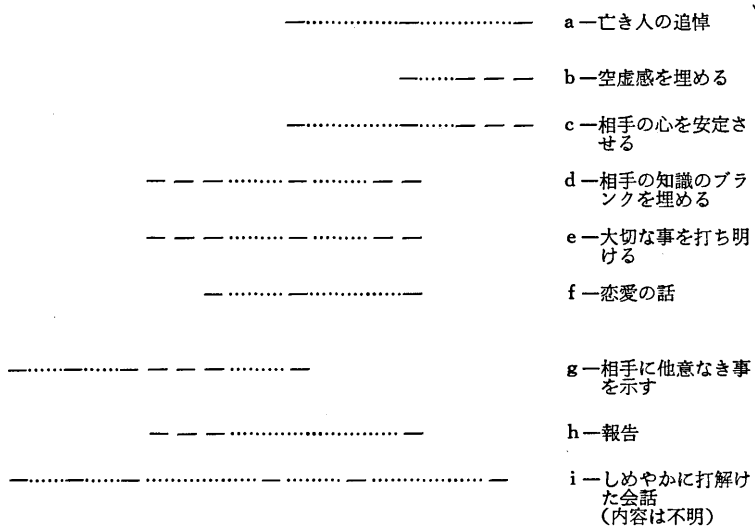
モノガタリという言葉は、このように、色々な使われ方をしており、これらすべてをつらぬく共通点というものは見出せない。(しいて言え、話をするという程度である。)しかし、或る種のモノガタリと他の種のモノガタリという具合に、個別に考えていけば、共通点を見出すことができる。この共通点を示したものが、次頁の別表の横の線である。aからfまでは内容における共通点を示し、gからiまではモノガタリの行なわれる形式についての共通点を示している。例えば、aの線は、「亡き人の追悼」という点で(1)と(4)と(7)が共通しているという意味である。

こうしてまず、モノガタリの内容の共通点を探してみると、すべての線が、(4)の「亡き人についての昔モノガタリ」と、(7)の「男女のモノガタリ」に集まっていることが分る。即ち、この(4)と(7)とが、モノガタリの内容的な中心をなしていると考えられるのである。それと共に、(4)や(7)のようなモノガタリなる語の使われ方は、使われる回数こそ比較的多いが、内容的には、本来のモノガタリという言葉が持っていた意味からは離れてしまったものと考えることが出来る。

そして、こうした(4)(7)のモノガタリが、本来、モノガタリという言葉が持っていないくはならない内容を、まったく失ってしまつたにもかかわらず、なおかつ、モノガタリと呼ばれているのは、内容的な意味からではなく、それが行なわれる形式において、モノガタリと呼ばれる性質を有しているからなのである。(4)における表現形式面での共通点を探してみると、(4)(7)のモノガタリは、g及びiの点において、他のモノガタリと共通点を有していることが分る。特にiの線が示しているように、それぞれのグループの中で、基本的なものから一番離れ、内容のないものとなつてしまつたもの(即ち、(2)(6)(8)が、(2)(3)(4)へとつながっている。つまりこれは、モノガタリ本来の内容を失ない、モノガタリと呼ばれるべき形式だけを残しているものが、(2)(3)(4)であるということの意味しているの

- 14 相互にする親しいモノガタリ (31)
- 13 上から下へのモノガタリ (10)
- 12 御機嫌伺いのモノガタリ (27)
- 11 年頃のモノガタリ (9)
- 10 場所のモノガタリ (7)
- 9 世のモノガタリ (17)
- 8 男女間の大方のモノガタリ (2)
- 7 男女のモノガタリ (33)
- 6 何とはなき昔モノガタリ (1)
- 5 昔モノガタリ(大切な思い出) (1)
- 4 亡き人についての昔モノガタリ (32)
- 3 悩みを持つ人をもてなす人を慰めるモノガタリ (4)
- 2 悩みを持つ人をもてなす人を慰めるモノガタリ (3)
- 1 亡き人をしのび残された人を慰めるモノガタリ (10)

計一八七例



内容面の共通点

表現形式面の共通点

である。

それではモノガタリと呼ばれるべき形式とはいかなるものであろうか。それには、モノガタリ本来の内容をもっとも失なってしまうている例のモノガタリを調べてみるのが一番良いと思う。例のモノガタリを検討してみると、そこには「打とけて」とか「へだてなく」とかい言葉が、しばしば使われており、モノガタリを行なう人物同士の關係が、へだてない間柄であることがまず分る。それと同時に「しめやかに」「しのびやかに」「打静まりたる」などの言葉もしばしば見出せて、モノガタリをする人の話し方が、静かなものであったことが分る。こうした例のように、内容的にはモノガタリの中心から一番離れてしまったものでも、必ず守られている条件があるということは、逆に言えば、その条件こそ、モノガタリをするにあたって最低限守られねばならぬ条件だということになる。即ち、モノガタリというものを、それが行なわれる形式の面から定義するならば、話し手と聞き手とが「打ちとけた」「へだてない」間柄であることが必要であり、「しめやかな」「しのびやかな」話し方でなければならぬのである。あまり親しくない者同士がひそひそ話するのはモノガタリではない。又、親しい者同士であっても、ワァワァ、キャアキャアと話するのはモノガタリとは言えないのである。

モノガタリの行なわれる形式という点については、以上のような結論を得るのであるが、それでは、モノガタリ本来の内容となるべきものは何であらうか。それは同一用例の数、及び、別表における内容面の共通点ということから考えて、(4)の「亡き人についての昔モノガタリ」と、(7)の「男女のモノガタリ」でなくてはならない。

この二つは、一見、かなり離れているように考えられるが、実際はきわめて近いものである。つまり、亡き人を話の主人公とし、その亡き人及び亡き人のあとを追おうとしている心を取り戻そうとする昔モノガタリと、不安定な女の心を鎮め、自分の方へ引きよせようとする男女のモノガタリとは、結局、モノガタリの同じ機能を利用していると言ふことができるのである。事実、この両者には、厳密には区別できないような場合がよくある。例えば、薫が宇治の大君に向つてモノガタリする時に、亡き八宮のことを話題にするとか、又、源氏が王鬘に向つてモノガタリする時に、亡き夕顔のことを話題にするという具合なのである。従つてこの二つは、同じ

内容と言ってしまうてもさしつかえない。そして、これこそモノガタリの本来の内容なのである。

こうした内容についての話、しかも、打解けた間柄で、しめやかに行なわれる話こそが、モノガタリと呼ばれるものの、一番もとの姿であったと思われるのである。

そして、このことは又、折口信夫博士の、万葉における相聞と挽歌は発想が同じという御意見とも、一致するものと思う。古代における相聞と挽歌の関係は、平安朝における散文としてのモノガタリ、即ち、「亡き人についての語り」と、「男女の恋の語り」の関係に発展して来ていると考えたいのである。

— 昭和四十年六月二十日 —